

学生国際交流の実践とその教育的意義

— 中国・大連理工大学主催の中日学生交流大会を例に —

上原 一明

Practice of a student international exchange and the educational significance:
Taking China and Japan student exchange meeting of Dalian Science and Engineering
University in China

UEHARA Kazuaki
(Received August 5, 2019)

キーワード：学生国際交流、野外彫刻

はじめに

刻々と変化し続ける国際情勢の中において、196 か国（平成 31 年 3 月 29 日現在 外務省 HP より）におよぶ国と国との関係は、地球規模で密接に関連し合っている。いわゆるグローバル化が進む現代国際社会において、政治や経済、環境などの諸問題は相互に解決してゆかなければならない。2019 年 6 月 28 日・29 日には大阪サミットが開催され、「自由で公正、無差別な貿易・投資環境を実現し、市場を開放的に保つよう努力する」という経済面や、「2050 年までに海に流出するプラスチックごみをゼロにする目標」という環境面の合意が採択された。世界のリーダー達が一堂に会し、合意することはとても意義があり極めて重要である。

大学教育においても、グローバル化に対する意識を高める教育に力を入れる取り組みを行う必要がある。具体的には、学生が外国へ長期留学することが望ましいが、カリキュラム上そう簡単にはいかない場合が多い。そこで短期留学という方法により、少なくとも現地で外国文化を学ぶ機会を得ることができる。今回、中国の大連理工大学が創設 70 周年事業の一環として、協定校を中心に日本の大学生約 400 名を招待し、中国と日本の学生交流を促進する大会が催され、山口大学から教育学部の 8 名の学生が参加した。我々は建築芸術学部のプランHに参加した。8 日間の間に練り込み陶芸実習や 3D 彫刻実習、学生共同作品制作、市内の彫刻公園見学、ブロンズ鑄造工場見学などの充実したプログラムを受けることができた。

本論は、参加した学生の視点を通してまとめ、学生国際交流の実践とその教育的意義を述べる。

1. 中日学生交流大会開催の背景と内容

大連理工大学のある大連市は、中国遼寧半島の先端に位置し、中国東北地方の中で最も近代化された都市のひとつである。大連市は日露戦争終結後の 1905 年、日本がロシアから租借権を継承した。この地を関東州とし、ロシアがこれまで整備してきた都市環境を、日本が第二次世界大戦終戦まで軍事拠点として発展させた街であった。特に中山広場には現在でも当時の日本人が建築した建物が数多く残っている。大連駅も東京の上野駅を模した駅舎として有名である。このように大連市は近代の歩みを色濃く残した歴史都市でもある。大連理工大学は 1949 年の中華人民共和国建国の年に創立された工科系大学であり、3 万 5 千人の学生を有する中華人民共和国国家重点大学の一つである。

今回、大連理工大学創設 70 周年記念事業のひとつとして、東京大学や東北大学などの国立大学や、早稲田大学や立命館大学などの私立大学などの協定校を中心に、学生と引率教員総勢 381 名を 4 月 29 日から 5 月 6 日までの 8 日間招待した。当交流大会では各大学の専門性に合わせた複数のプランが設けられ、山口大学は建築芸術学部のプランHに参加した。練り込み陶芸実習は、伝統的な練り込みの技法を指導講師のもと電動

ろくろを使って数点制作した。最終日には、講師の先生や大連理工大の学生が仕上げの高台を形成し焼成されてあったり、プリントアウトされた3D彫刻と共に送別会の場で各作品を受け取った。3D彫刻実習では、充実した設備が整われており、各学生はパソコン上で作品をデザイン制作した。指導講師が運営する3Dプリンター工場においてそれらの作品は立体的にプリントアウトされた。学生共同作品制作は、それぞれ日中の学生がペアを組み、共同で作品を制作するという試みで、言葉が通じない中でスマホの翻訳アプリなどを駆使しながら、それぞれコミュニケーションを取っていた。市内の彫刻公園見学は、海岸沿いに設置された野外彫刻を見て回ったのだが、「海」をテーマにした作品群であり市民の憩いの場として活用されていた。ブロンズ鋳造工場では、砂型鋳造や蝟型鋳造の製作現場を見学することができ、工場長の説明のもとその製作工程を学ぶことができた。小型のブロンズ像から数メートルにもおよぶ巨大なブロンズ像まで製作されている現場を見学できたことは、学生にとっての学びは多かった。

2. 参加学生の視点から

今回山口大学教育学部から参加した学生は、美術教育選修の岡田瑞紀、田中亜実、久恒祐貴、大澤郁也、工藤俊介、国語教育選修の山口知子、山本裕美子、幼児教育選修の森田歩香の8名である。

以下、参加した8名の学生それぞれの視点による文を紹介する。

2-1 技能とやさしさ（美術教育選修4年 岡田瑞紀）

今回私たちは山口大学を代表して大連理工大学中日学生交流大会に参加した。この中国大連理工大学との交流大会で大きく印象に残った2つのことについて述べる。1つ目は大連理工大学の学生の皆さんの技能的な能力の高さについてである。私たちは主に彫刻を専攻している学生と交流をした。学生の作品を見せてもらったり、実際に制作をしたりした。大連理工大学の学生の作品はどれもとても上手く、その人の良さがしっかりと伝わる作品であった。粘土だけにとどまらない発想の広い作品を見ることは私にとって大きな刺激になった。また、中国の長い歴史で培ってきた伝統的なやり方だけではなく、パソコンなど最新の技術を使った3D彫刻についても見学、体験させていただき、私の視野を広げることができた。

2つ目は大連理工大学の学生の人となりの素晴らしさについてである。今回の1週間の滞在の中で多くの学生に支えられ、助けられた。日本語の通訳ができる学生や、英語で意思疎通しようと頑張ってくれた学生、翻訳アプリを介して常に私たちのことを慮ってくれた学生、英語も日本語も分からないが身振り手振りで頑張ってくれた学生、様々な学生がサポートをしてくれたからこそ、楽しい交流大会になったのだと思う。

日本と中国は古来より深い関係にある国である。そしてこれからもその関係は続いていくものである。今回の交流で、日本から出なければ分からないことばかりだと感じた。経験すること、体験することは自分の貴重な財産になる。これからも様々なことを体験、経験して研鑽を積んでいきたいと考える。



図1 交流会初日の集合写真（岡田提供）

2-2 大連理工大学での制作交流体験（美術教育選修4年 田中亜実）

大連理工大学の建築芸術学科の作業場はとても広々としていて、学生それぞれが様々な設備を利用することができる。学生が制作した作品が廊下や教室などいたる所に展示してあるので、見本が身近であり、創作意欲が掻き立てられる良い環境であると感じた。今回は「ろくろを利用した陶芸」と「デジタル彫刻」について記載する。

ろくろを利用した陶芸では、中国人学生に英語と少しの日本語で指導を貰いながら、一輪挿しや湯飲みなどを制作した。触ったことのある萩土よりも柔らかくすべすべとした白い粘土に、自分で選んだ色付きの粘土を混ぜて好きな形を作る。焼き上がりまではどのような模様になるのか分からないところが、この陶芸の面白さだと思う。

デジタル彫刻では、ZBrush というソフトとペンタブレットを用いた作品を鑑賞した後、実際に学生に指導を受けながら制作した。画面上のボールをペンで凸凹させ、おおまかな形を作る。ペン先を細くしたり、他のツールを使用したりすることで細かな質感の表現も可能である。完成した作品は3Dプリンターで出力する。このデジタル彫刻は実際に粘土を触るように直感的に操作でき、木や石を削ることもないため、幅広い人が安全に彫刻にチャレンジできると感じた。実際に日本のフィギュア原型師やものづくりが趣味の方も、このソフトを利用しているようだ。これからも機会があれば、ソフトを用いた彫刻に触れてみたいと思う。

陶芸・デジタル彫刻など、幅広い分野を学ぶことができる大連理工大学での彫刻体験は、現地の学生との交流も含めとても有意義だった。言語の壁を越えひとつの作品を作り上げたときは大きな達成感を感じた。



図2 ろくろを使った陶芸体験で制作した作品（田中提供）

2-3 国際交流による変化（美術教育選修3年 久恒祐貴）

国際交流は多くの学びがあり、自分自身の価値観を変える大きなチャンスだと私は考える。今回、私達は中国の大連理工大学の建築芸術学院の先生と学生を中心に国際交流を行った。初めて訪れた中国の大連は、日本と比較的距離が、街並みも交通量も人の雰囲気も何もかもが日本とは違っていった。唯一、漢字に親しみを感じたことを覚えている。私達を受け入れてくださった建築芸術学院は彫刻や陶芸を専門的に勉強しており、私たちに、練り込み陶芸やデジタル3D彫刻の体験活動をさせてくださった。さらに、大連近郊の博物館や歴史館を見学、オブジェがたくさんある海岸や公園を探索し、今回の国際交流は学校内に留まらず、大連そのものを深く知ることができた。日本と中国では言語が異なるが、ボディーランゲージやタブレット端末の翻訳アプリなどを活用し、積極的なコミュニケーションをとることができた。翻訳アプリの活用は、現代だからこそ出来たコミュニケーションの取り方だと考える。言葉が通じなくても、コミュニケーションが取れるため、国際交流が以前よりもしやすくなったのではないだろうか。また、私自身、初めて中国を訪れたが、日本の教科書で見た中国の印象とはかなり違うとても近代的な印象を受けた。これは、実際に自分の目で見て、交流したからこそ分かったことである。

今回の国際交流を終えて、私は中国語を勉強し、中国の大連以外の都市にも訪れてみたいと考えている。また、私は外国の教育制度に興味があるため、中国の教育制度や歴史に関する話を聞くことができたことは貴重な経験だった。国際交流を行うことは、自分自身の知識と未来に色をつけることであると私は実感している。



図3 日本の各大学と大連理工大学のサークル交流イベント会場にて（久恒提供）

2-4 国際交流（国語教育選修3年 山口知子）

今回の交流大会で特に感じたことは主に2つある。1つ目は、彫刻と街についてだ。なぜ大連で彫刻が有名なのか私はずっと不思議だった。その土地に降り立って理解した。大連という都市はいたるところにビルと古い感じの建物、そして彫刻が当たり前のように立ち並び、まるで都市全体が一つの彫刻作品かパッチワークのように見えたのだ。在るのが当然な作品たち。だからこそ彫刻がこの都市で発展したのだと感じた。

2つ目は関わろうとする気持ちの重要性についてだ。今回の交流大会の間、私は個人行動をする機会があった。私が話せる中国語はこんにちとは数字、ほぼそれだけ。翻訳のアプリも持っていなかった。英語が話せるからどうにかなるだろうと軽い気持ちで行動したのだった。結局その時間いっぱい、私は身振り手振りやスマホの電卓機能を使用して何とか意思を伝えていた。英語が殆ど全く通じなかったのだ。けれど私は集合の時間までに目当てのものを買い込み、大きなトラブルに見舞われることもなかった。中国の人達は皆何を言いたいのかわからなかっただろう私に親切で、いろいろと手を尽くして対応しようとしてくれた。このことは、私が関わろうとしたからこそ学べたことだと思う。

私たちは、外国の人に触れる機会が増えてきたといっても、普段彼らを遠い存在、異質な者として見てしまう。けれど私はこの交流大会で、外国にも私たちと同じように当たり前で暮らしている人がおり、彼らは私たちと同じように喜怒哀楽を持っている人間なのだというを実感し、異質な者だとは見る事が出来なくなった。これが国際交流の本質なのだろう。



図4 星海公園の海岸にて（山口提供）

2-5 風景の中の彫刻（国語教育選修3年 山本裕美子）

大連市では、星海公園など彫刻が数多く設置されている公園や広場を見学した。その中で感じたのは、彫刻が都市風景に溶け込み、一体化しているということだった。風が吹き抜けるデザインのものや、鏡のような素材で作られ、景色を映し出すものなど、風景や環境と調和した彫刻が多かった。彫刻そのものの見た目だけでなく、都市風景とのバランスや一体感も意識して制作されたのだと感じた。また、人物彫刻や中国の絵画のようなデザインの彫刻など歴史や文化と関連したものも置かれており、中国の長い歴史を伝える上でも大きな役割を果たしているのだと考えられる。

海に面した公園には本を広げたようなデザインの巨大な彫刻があった。本を開いた形と、そこから見える開けた景色が共に合わさり、明るい未来や希望といったイメージを抱かせるデザインであると感じられた。さらに、自分達もそこに登って海を見渡すことで、明るい未来に向かっていく、という感覚を体全体で受け取ることができ、作品の発するメッセージの受け手として、その場にいる人々との一体感も生まれていた。こうした強いメッセージを発すると同時に、風景の一部や交流の場としても機能している点で、単なる展示作品の枠を超えた彫刻の新しい可能性が示されていると感じた。この巨大な本型彫刻のように上を歩けるものや、自由に手を触れることができるものが多く、訪れる人々が視覚と触覚の両方で彫刻を味わい、楽しんでいた。街の人々が彫刻に対する親しみをもっていることは、これから新たな彫刻作品を展示する上でも大きな支えであり、励みになるのではないだろうか。彫刻を制作する側にとっても、非常に良い環境であると感じた。



図5 海辺の彫刻公園に設置された、風景に溶け込む彫刻作品（山本提供）

2-6 屋外彫刻の魅力 ～大連市と宇部市を比較して～（幼児教育選修3年 森田歩香）

大連市は、星海公園のように野外彫刻が多く設置されている公園や広場が多くあった。私の出身地である宇部市にも、多くの野外彫刻がある。私は、2つの都市の野外彫刻を比較することで、屋外彫刻の魅力や意義が設置場所に影響を受けることを感じた。

大連市は広場や公園に多くの彫刻が設置されている。鑑賞者は、作品そのものだけでなく、周囲の海や芝生などの環境も一緒に味わうことができる。又、彫刻の設置を前提とした空間づくりがされていることで、大きな作品がいくつもあり、その一つ一つが目立っていた。又、作品数が多く、それぞれの彫刻に対して十分な空間がとられていて、広場全体が広大な美術館のようだった。

宇部市は街中に多くの野外彫刻が設置されている。街中に野外彫刻があることで、彫刻が街に溶け込む。彫刻は、多くの住民の目に留まり、生活風景の一部となっている。更に、触ったり登ったりでき、作品に対する行動が制限されていないものも多い。これによって、彫刻が遊具や街のシンボルとしての役割を果たすことができている。

大連市と宇部市の屋外彫刻に共通している魅力は、会話したり遊んだりしながら作品を鑑賞できることだ。自由な鑑賞ができることによって、子どもや美術に対する関心が薄い人でも彫刻に親しみを持ち、自由な楽しみ方ができる。反対に、公園や広場か街中かという設置場所の違いによって、鑑賞者が作品に持つ印象や

作品の役割が変化する。大連市と宇部市、それぞれの野外彫刻の魅力が広く周知され、人々にとって野外彫刻がより身近なものになればいいと感じる。



図6 高新区彫刻公園で鑑賞した彫刻（森田提供）

2-7 中国彫刻と日本彫刻の差異（美術教育選修2年 大澤郁也）

大連理工大学や大連市内では、数多くの彫刻作品を目の当たりにすることができた。今回目にするのできた中国の彫刻と日本の彫刻の差異について考えてゆく。

日本彫刻は「静」こそ美とした彫刻が多いように感じられる。「美は細部に宿る」という言葉があるように、日本の彫刻は繊細で「静」を重視した作品が多い傾向にある。これに対して中国の彫刻はダイナミックで物体の流動を感じられるような作品が多いと感じた。人の顔の彫刻を比較してみても、日本は目を閉じた無表情の彫刻が多い。一方で中国の彫刻は顔表情筋が多少誇張されて作られている。それゆえ喜怒哀楽の感情が強く伝わるような作品を多く感じた。それゆえ日本の彫刻からはモノクロの生を感じたが、中国の彫刻は、それぞれ彩度の高い色を感じた。人以外の彫刻にも同じような印象を持った。日本の彫刻は、きめ細やかに洗練され、静を感じるものが多い、一方で、中国の大連市でみたモニュメントや彫刻はうねりや隆起によって巨大な躍動感が生み出されていた。またその躍動も街中の風景に溶け込んでいたり、風に流されていたりとパワフルなエネルギーを感じつつ、調和されている印象があった。ここで日本人と中国人の性格を比較してみると、日本人は「わびさび」という文化があるように奥ゆかしく、なおかつ比較的丁寧な性格である。これは日本彫刻の繊細で「静」を感じる作品が多いことに繋がってくるのではないかと考えられる。また、中国人は、現地の中国人学生とコミュニケーションを通して、しぐさや表情で感情がダイレクトに伝わってきて言語は通じないが、コミュニケーションはとりやすかった印象である。このこともまた、中国彫刻の表情筋のダイナミックさに繋がっているのではないかと思った。

以上のことから日本彫刻と中国彫刻にはそれぞれ「静」と「動」の性質を持っている彫刻が多く、それは日本人と中国人の人間性の特質に由来しているのではないかと考えられる。彫刻はその国の人間性を吸収し、物体としてこの世の中に存在しているのである。

2-8 立体彫刻の新たな道（美術教育選修2年 工藤俊介）

今回の大連理工大学交流大会に参加した、大連理工大学構内の建築・美術学部関係建物周辺・内部ではいくつもの展示物があり大きなものでは、2～3mほどもある銅像の物から、学生作成であるだろう作品から、いたるところに展示がなされており、美術館等に訪れなくとも作品を目にする機会が多いように感じた。また、作品の制作環境も充実しており、今回私たちが体験したうちの一つである、3Dモデルに関して述べる。

3Dといっても3DCADと3DCGの大きく2つがあり、後者では主に映像作品におけるキャラクターなどに使用される。対して3DCADは設計などの数値が必要なものに使用され、3Dプリンタに使用されるのは、3DCADのほうである。3DCGではポリゴンによる集合体であり表面をよく見せるためによく利用される。そのため、外面だけが作られており、中身がない場合やデータが大きい場合などがあり、3Dプリンタでは使用できない場合がある。また、3Dソフトウェアとはいっても、CADかCGかの向き不向きがある（どちらも可能なものもある）ため、用途に合わせたソフトウェアを選ぶ必要がある。

この度の体験で使ったソフトウェアはZBrushという、3Dソフトウェアである。このソフトウェアは粘土のようにモデルにポリゴンを盛ったり、削ったりすることで比較的直観的にモデリングを行うことができるソフトウェアである。モデリングの際には液晶ペンタブレットを用いて、それぞれが初めての3Dモデリングを行った。出力された作品は非常に軽く、モデリングによっては材質などの変更、彫刻のような質感に仕上げることも可能であり、これからの時代の立体作品制作の新たな方法の一つであるといえる。^①

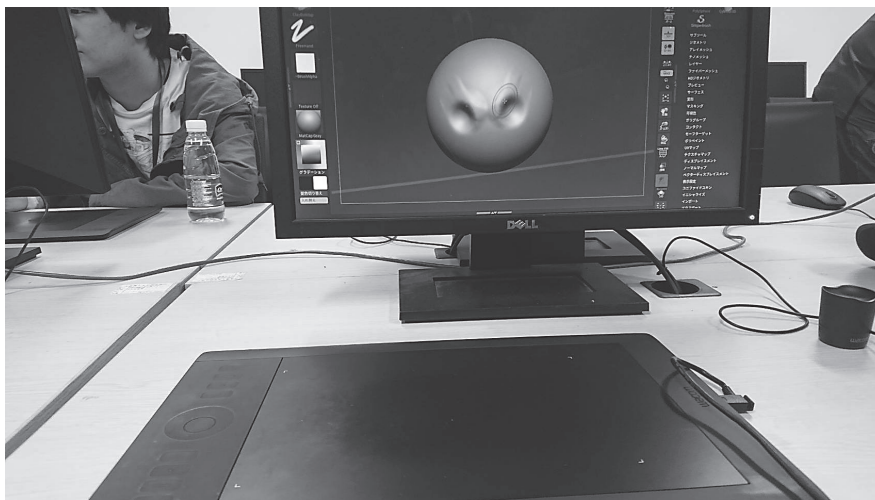


図7 私たちが体験した3Dモデリング中の画像。手前のタブレットで操作をし、パソコンのモニターをみながら作業を進めた。(工藤提供)

3. 学生国際交流の教育的意義

当大会の開闭幕式においては、大連理工大学副学長と共に日本から招かれた国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）中国総合研究・さくらサイエンスセンター上席フェローの挨拶などもあり、JSTとの良好な関係も見取れた。さくらサイエンスセンターは、科学技術の分野で交流を深めることにより、日本とアジアなどの国・地域との友好関係を強化し、日本の教育・研究機関のグローバル化を促進、また、科学技術イノベーションに貢献しうる海外からの優秀な人材の育成と継続的な交流に寄与することを目的とするさくらサイエンスプランを実施しており、日本とアジア青少年サイエンス交流事業を統括している。^② 日本における外国の学生招聘により、招来日本との友好な関係を構築していくことにおいて重要な役割を担っている。

学生国際交流を通して実際現地に足を運ぶことの重要性についてどのような効果があるのか。通常マスメディアによる諸外国の報道などは、主に政治的問題や事件・事故などマイナス面がクローズアップされがちであり、外国へ行ったことのない若者にとっては、あまり印象はよく映らないように見受けられる。しかし実際に現地に行くと、人々の豊かな生活があることを自分自身の目でみることができる。日本とは異なる環境に接することにより、改めて自国の良さや改善すべき点などについても気づかされる。実際、大連市においてはキャッシュレス化が進んでおり、ショッピングやタクシー料金、小さな屋台においてもQRコードを使用し、スマホで決済しているのには驚かされた。小銭や古くなり破れた紙幣でやり取りするより間違いはなく、スピーディーで効率的である。それだけ都市全体が整備され、制度に信用があるという証拠である。この点は日本より進んでいると感じた。また、今回の交流活動では日本と中国の学生同士においても、共通の話題などを通して親しくなったようである。以前は紙と鉛筆による筆談で意思疎通を図っていたが、現在の彼らはスマホの翻訳アプリを駆使して会話を行うなど、最先端のコミュニケーション方法を取っていたこと

に時代を感じた。これらも実際に現地に来て初めて分かることであり、相互理解を深め広げていく。

今回参加した8名の学生達も出発前は、中国の大連に行くことに対する期待や不安があったようだが、実際に大連理工大学で滞在した一週間の間に以前とは全く異なるの印象を受けたようである。或る学生は豊かな都市空間を演出するためのパブリックアートの利点に目を向けたり、また或る学生は3D彫刻の最先端技術の可能性を感じたりしている。やはり全体的に共通して言えることは、当人を含めたこれまで多くの日本人が持っている中国に対するイメージが変わったということである。特に大連の人々が自身となんら変わらない優しさやユーモアを持ち合わせているということに気づいたということである。「百聞は一見に如かず」とは正にこのことで、自身の目で見ること、体験することで一気に国際社会に対する視野が広がる。その視野が広がるとこれまでの既成概念の壁が取り払われ、より遠くにあるものに関心が芽生え、更なる探究心が育まれる。参加した学生達はそれぞれ独自の視点で物を見、初めて会う人々と接し、これまでになかった新しい発見があった。学生の時にしか持てない感性をその時に体験すること、またその時にしか経験できないことの重要性がそこにある。大連で経験した今回の学生交流の場はもう二度と訪れないからなおさらである。視野の開けた学生達がこれからどのような探究心を持ち、どのような社会で活躍していくのかが楽しみである。

おわりに

現在の日本社会は理不尽な殺人など、以前では考えられない事件が多発している。これら一部の利己的な思考や閉塞感を打破するひとつの有効な方法として考えられるのは、自国のみの生活で凝り固まり閉鎖された価値観を、他国の人々との交流を通して、またそれらの生活を見て知ることで思考を柔軟にしていくという国際交流ならではの経験であり、また将来に亘って国際社会の安定と発展にそれが大きな役割を果たしていく。比較し客観的な視点で物事の本質を理解し、他国の芸術文化に接することで、情操を育成するのである。また他国の文化やそこに住む人々とその生活を知ること、自国の、そして自分自身について客観視することを可能にしてくれる。これを「知行合一」に当てはめると、世界の様々な価値観を知ること、より良い思考と行動を行うことができるということになる。

謝辞

今回の中日学生交流大会において、プランHでご指導していただいた鄧威先生、鄭森先生、于良文先生他多くの大連理工大学教職員の方々、並びに同大学学生の皆様に感謝いたします。

注)

① ZBrush について参考： <https://oakcorp.net/pixologic/>

3DCAD と 3DCG との違いについて参考： <https://3d-modely.com/blog/3d-modeling-soft/post-1452/>

<http://d-engineer.com/3dcad/> <http://open.shonan.bunkyo.ac.jp/~hatakama/zemi/A8P21075.pdf>

② さくらサイエンスプラン HP より： <https://ssp.jst.go.jp/index.html>